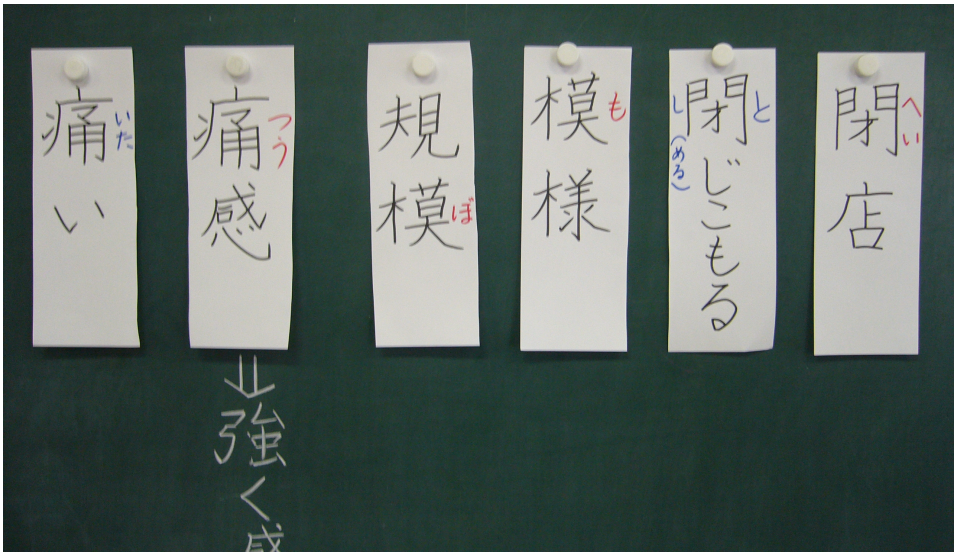
1　単元導入時の新出漢字の指導について（５・６年）

【板書事項】



【指導の流れ】

1　カード（画用紙を切ったもの）を黒板に磁石ではって、担任が筆順を説明しながら、新出漢字（本文で使われている熟語の形で）を黒ペンで書く。音読みと訓読みがある漢字は、音読みの熟語から書くようにする。その右側に音読みの振り仮名を赤で書く。難しい書き順の場合は、空書きで何回か確認する。

その後、訓読みのある漢字の場合は、別なカードに単語を書いて、青で振り仮名を書く。

2　漢字練習帳に筆順に気を付けながら熟語を書かせる。その他の情報についてもメモを取らせる。

3　教科書巻末の「新しく習った漢字」のページに掲載されている熟語を全体で音読し、難しい言葉の場合は、各自国語辞典で調べ、メモを取らせる。

【留意点】

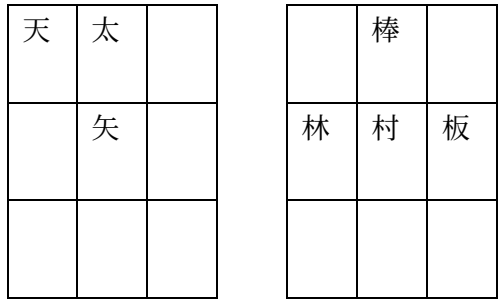
1　新出漢字の筆順だけでなく、あわせて、「へんやつくりの構成」、「漢字の由来」「覚えるときの注意点」など、ほかの大切な指導事項についても、児童の考えを発表させて、みんなで漢字カードを作っていくという意識をもたせるようにする。

この漢字カードは、授業の後に教室の壁面に掲示し、常に目に触れさせるようにする。漢字テストのときは、机の向きを工夫するなどして児童の目に触れないようにさせて、終了後の答え合わせのときに、漢字カードを活用することができる。

2　「へんやつくり」「覚えるときの注意点」などについてポイントをメモしたら、自主勉強などで、もう一度まとめるようにする。何度も書くことで、着実に覚えるようにさせる。

2　同じ部首の漢字を調べさせる指導について
～漢字ビンゴゲームを活用した指導～（５・６年）

【板書事項】



【指導の流れ】

1　部首が比較的分かりやすい漢字を一字、児童に提示し、漢字の部首を考えさせる。
　（例）　樹

2　部首を特定するのが難しい漢字を一字、児童に提示し、漢字の部首を考えさせる。
　（例）　夫

3　漢字辞典を引かせ、それぞれの漢字の部首（部首名）を確認させる。

4　提示した二つの漢字と同じ部首をもつ漢字を考えさせ（カードが埋まらない場合は漢字辞典を使って調べさせ）、配置を工夫しながら二枚の自分のビンゴカードに記入させる。

5　初めは、部首が比較的分かりやすい漢字から漢字ビンゴゲームを開始する。教師あるいは代表の児童を順番にあて、それぞれの部首の漢字を一字ずつ黒板に書いていき、児童は自分のカードにある漢字に〇を付けていく。

【留意点】

1　初めは、部首が明らかなもの、すべての児童が分かるもの、慣れてきたら、部首が難しい漢字を提示する。二種類に限定することなく児童の実態に合わせて行う。

3　漢字辞典で確認させ、自分の知らない部首や間違って覚えていた部首などに気付かせる。

4　漢字数が少ない場合は二、三種類の部首の漢字を調べさせ、ビンゴカードに記入させる。学習していない漢字の記入も認める。

5　黒板に書く際に、漢字の部首は赤チョーク等を使うことで意識付けを図る。
　全体で行うだけでなく、グループや列を生かして行う方法も有効である。

３　同音異義語に注意して使う習慣化を図る指導について（５・６年）

【板書事項】

①図る（意図や工夫）
・解決を図る
・合理化を図る
・便ぎを図る

②測る（長さや面積）
・面積を測る
・距離を測る

③量る（体重、かさ）
・体重を量る
・分量を量る

④計る（数や時間、計画）
・時間を計る
・タイミングを計る
・将来を計る
・計りしれない

【指導の流れ】

1　グループごとに同音異義語について調べ、まとめさせる。

「グループで調べたい言葉を決めたら、国語辞典で調べ、画用紙に、言葉の意味と用例をまとめましょう。各自、国語辞典や漢字辞典を使って、できるだけ多くの用例を取り上げて、みんなのためになるまとめにしましょう。」

2　教室掲示し、常に目に触れさせるようにする。

3　漢字テストをする時に、繰り返してこのカードの中から出題し、同音異義語や同訓異字の日常的な定着を図るようにする。

【留意点】

1　同音異義語や同訓異字については、教科書の各単元末の「てびき」で取り上げられていることが多いので、その都度、しっかりと指導する必要がある。また、「てびき」で取り上げるだけでは定着しないので、グループでまとめた画用紙を教室に掲示したり、その中から漢字テスト問題として出題したりするなどして、日常的に取り組んでいくとよい。

2　他教科の授業でも、同音異義語や同訓異字が出てきたときは、掲示されているカードに注目させて、折に触れて復習するようにする。

3　朝のスキルタイムなどの時間を活用してもよい。

4　漢語の組立てを考えさせる指導について（５・６年）

【学習プリント①】

〔漢語の組立てを考えよう〕

①大小　②人命　③苦楽
④黒板　⑤不良　⑥明暗
⑦温水　⑧増加　⑨読書
⑩未知　⑪切断　⑫造船
⑬無人　⑭生産　⑮登山

A ①大小	B ⑧増加	C ②人命	D ⑨読書	E
a	b	c	d	e

【指導の流れ】

1　漢語を記したプリント①を配布する。

2　十五個ある漢語を「五つの組」に分けることを伝える。（→A・B・C・D・E）

「次のヒントをもとにして分けましょう。」

「ヒント①　A大小　B増加　C人命　D読書　この四つは分かれます。」

「ヒント②　A～Eには三つずつ入ります。」

3　三～四名のグループになり、互いの考えを交流させる。

「お互いの考えを参考にして、グループで考え直しましょう。」

「ヒント③「一字ずつ訓読みして、上下の『つながり方』を考えます。」

4　二つの漢字の組み立て（つながり方）について、書いて説明させる。

「次のヒントをもとにして、それぞれの語の組み立て（つながり方）についてグループで考え、a～e欄に書いて説明しましょう。」

「ヒント④　a＝「反対の意味になっている」

5　各グループ代表者に考えを黒板に書かせ、説明を全体で聞く。

6　発展学習として、既習の教科書教材等の漢語もA～Eに分類させる。

【留意点】

1　漢語は十～十五程度示す。「2」の作業の前に、児童に指名しながら読み方を確認しておく。

2　一斉学習の形で始める。実態に応じて「ヒント①・②」を示す。※ヒント①は最初に示してもよい。

A大小・苦楽・明暗　B増加・切断・生産
C人命・黒板・温水　D読書・造船・登山
E不良・未知・無人

3　必要に応じて国語辞典・漢字辞典を使用してよいことを伝える。組分けの基準が「意味」でなく、上下のつながり方であることを板書等を用いて説明する。

例　「人命」→人(ひと)の命(いのち)

4　aの例を参考にさせ、グループごとに漢語の組み立て方について、自分たちの言葉で説明させる言語活動を行わせる。考えを交流させながら、時間をかけて丁寧に進めさせたい。

例　b同じような意味の漢字がつながっている

c上の字が下の字を詳しく説明している

d上下逆に、下から上の字へつながっている

e上の字が下の字の意味を打ち消している。

※説明を聞き合わせる中で、適宜教師が補説し、漢語の構成の類型について理解を深める。

5　同音異義語と関連付けて，漢字の表意性・表音性の理解を深める指導について①～国語辞典を活用して～（５・６年）

【板書事項】

カルタづくりをしよう

＊あつい○○○

・厚い本　・熱いお湯　・暑い日　・厚いステーキ　・熱い風呂

＊放課後に友だちと（合う・会う）

学期　二がっきが始まる

楽器　がっきを演そうする

協力　全員できょうりょくする

強力　きょうりょくなチームになる

※同音異義語

効果　薬のこうかが現れ始めた。

校歌　朝会でこうかを歌う。

【指導の流れ】

1　「あつい○○○」と黒板に書き示す。

「空欄に入る言葉を書きなさい。」

C　「本、一日、お湯、お風呂、卵焼き…」

2　空欄に入る言葉によって「あつい」が異なる漢字となることを考えさせる。

「『あつい』を○○○に対応した漢字に直しなさい。」

C　「厚い本、暑い一日、熱いお湯…」

3　別な語例について示し、正誤を考えさせ、漢字の表意性について説明する。

「『放課後に友だちと（合う・会う）』は、どちらが正しいでしょう。」

4　同音異義語（同訓異字）を調べる場合は、国語辞典が有効であることを実感させる。

「国語辞典を使って、発音は同じだけれど違う意味をもつ言葉を三組集めましょう。」

C　「楽器・学期」「強力・協力」「校歌・効果」

5　カルタづくりの方法を示す。

「集めた言葉でカルタをつくりましょう。絵札には『正しい漢字』、読み札には『その漢字（漢語）を用いる文』を書きます。」

6　ペア・グループの形態でカルタ遊びを行う。

「作ったカルタを出し合って、隣の人とカルタ遊びをしましょう。」

【留意点】

1　漢字の力を付けるための「カルタづくり」を行うことを最初に伝えておく。空欄に入る言葉は思いつくだけノートに書かせる。

2　ここでは、まだ辞書を使用させない。文脈に即して、自分の語彙で考えさせる。

3　発音が同じで意味が違う語のことを、「同音異義語」ということを板書し、補説する。

4　辞書の引き方（能力）で個人差が大きい場合は、凡例となるように、「がっき」を一斉に調べ、楽器・学期の違いを板書で示す。

5　読み札の「文づくり」については、辞書の用例文を参考にさせてもよい。

6　カルタ遊びの流れ

①　教師が読み札を読む。

②　正しい漢字の書いてある札を取る。

③　ペアで全部取り終わったら、グループ（五～六名）で行う。

☆参考資料

森竹高裕氏の実践を参考に改編

５　同音異義語と関連付けて漢字の表意性・表音性の理解を深める指導について②（５・６年）

【学習プリント】

何かおかしい？
～変換ミスコンテスト～

① 五百円で親使わないと。
② これから家事二千年します。
③ 最近は体調が婦長です。
④ 寄生虫で渋滞だ。
⑤ 今年から貝が胃に住み始めた。
⑥ 生ごみが産卵しています。
⑦ 大腿骨がつかめると思います。

〔正しい変換〕

① 五百円でおやつ買わないと。
② これから家事に専念します。
③ 最近は体調が不調です。
④ 帰省中で渋滞だ。
⑤ 今年から海外に住み始めた。
⑥ 生ごみが散乱しています。
⑦ 大体こつがつかめると思います。

【指導の流れ】

1　「漢字の特質～表意性・表音性～」についての学習であることを確認する。
・アルファベットや平仮名と漢字を比較して、「表意性」について実感させる。

2　指名して、一文ずつ読み方を確認していく。

3　学習プリント『変換ミスコンテスト』を配布し、すべての文に振り仮名を付けさせる。

4　例文を正しい漢字に直させる。
「間違っている部分に傍線を引き、正しい使い方に直しましょう。」
「間違いが二カ所以上のものもあります。」

5　三～四名のグループになり、互いの考えを交流させる。

6　グループごとに問題を分担し、直した文を黒板に書かせる。

7　まとめとして、漢字が例外なく「特定の意味をもつ」ことに触れ、使い方に注意が必要であることを確認する。

【留意点】

1　漢字の「表意性」を示す例を示す。
・学校に木ます。　・高価を歌う。

2　なるべく大きな声を出して読ませることで、各文の変換ミスを実感させる。

3　この時点で教室がざわめき始めるが、振り仮名を付けることだけに専念させる。

4　直せないものについては、後回しにして構わないことを伝える。

5　必要に応じて国語辞典・漢字辞典を使用してよいことを伝える。
楽しく考えながら、「漢字の特質」に触れさせることがねらいなので、個々の発想を大事にさせる。

7　上記に加え、次の点にも触れておく。
・漢字を熟語で練習することの大切さ
・文章をワープロ作成する際の留意点

☆参考資料　日本漢字能力検定協会ＨＰ

6　家庭学習の進め方の指導について（５・６年）

【漢字練習帳に書く時の例】

傷（きず）　傷　傷　傷　傷口

傷薬（しょう）　傷を負う

負傷　軽傷　重傷

損傷　傷心　感傷

批判（ひはん）　批判　批判　批判

批評　批正

存在（そんざい）　存続　存立　存亡

存分　保存

提供（ていきょう）　供給　試供品

供え物　子供

お供を連れて歩く

【指導の流れ】

1　授業で新出漢字を学習した日の宿題に、漢字練習を出す。

「授業で書いた漢字の下に、二～三回練習した後、教科書の後ろに載っているそのほかの熟語も、練習してきましょう。」

「振り仮名に注意する漢字が出てきたら、赤でサイドラインを引き、意味の分からない熟語が出てきたら、意味調べをしてメモを取りましょう。」

2　加えて、国語ドリルの新出漢字のページで、筆順、へんやつくりなどを復習させる宿題も出す。

3　自主勉強として、今日習った漢字の漢字テストを自分で作成し、解くようにさせる。

「漢字テストを自分で作って、今日勉強した熟語を覚えたかチェックしましょう。間違った漢字は覚えるまで何回か練習しましょう。」

【留意点】

1　そのほかの熟語を練習することで、新出漢字との関連性に気付かせたり、意味を実感させたりすることができる。熟語の中には、今まで知らなかった熟語も出てくるので、この機会に、振り仮名や意味も覚えることが、今後の学習に役立つことを助言する。形だけで覚えても、すぐに忘れてしまうので、意味と関連させて覚える重要性に気付かせる。

2　漢字練習をするときは、へんやつくり、筆順などを意識しながら練習するように注意を促す。

3　自主勉強で、毎日漢字テストを作って解く習慣を付けると、漢字に強くなることを助言する。最近習っている漢字だけでなく、忘れたかもしれないような漢字を問題に出すことで常に復習できることに気付かせる。

7　読めない漢字を進んで読もうとする習慣を身に付けさせる指導について（５・６年）

【調べ学習の資料例】

野口英世【一八七六～一九二八】

世界的な細菌学者。幼名は清作。済生学舎で医学を学び、その後、伝染病研究所で北里柴三郎に師事。明治三十三年に渡米、デンマーク留学後、ロックフェラー医学研究所員に推挙される。南米のエクアドルで黄熱病……

※サイドラインの漢字が四点、それ以外の漢字が二点

【指導の流れ】

1　社会科や総合的な学習の時間などで、調べ学習をするときに、習っていない漢字と出合ったとき、できるだけ自力で読むように習慣付ける。

「前後の文章から見当を付けたり、へんやつくりから、読み方や大まかな意味の見当を付けたりしてから、国語辞典で調べましょう。見当がはずれて調べられなかった時は、漢字辞典を使いましょう。」

2　宿題や朝のスキルタイムなどで、有名な文学作品や新聞記事、説明書などの一部を視写させたり、プリントにしたものを配布したりして、振り仮名テストを行う。

「これは、有名な○○の○○という小説の一部です。辞典を使ってもよいことにするので、制限時間内に、できるだけ正しく、たくさん答えられるようにしましょう。習った漢字は二点、まだ習っていない漢字は四点にします。」

【留意点】

1　調べ学習のとき、読めない漢字に出合ったとき、児童はすぐに友達や担任に聞いてしまう傾向にあるので、自分で考えたり、調べたりする習慣を身に付けることが大切であることを理解させる。

五年時の漢字の由来の学習を想起させて、へんやつくりから読みの見当を付けさせて、国語辞典で引く手順を把握させる。

最初は調べるのに時間がかかるかもしれないが、慣れてくると素早く引けることや、全体的に速くなってきたときに、話題として取り上げ、賞賛するようにする。

2　未習漢字の方の得点を高くすることにより、未習漢字に対して意欲的に調べようとする態度を育成する。

今後も、自主勉強などで、文学作品の一部や新聞記事などを視写し、振り仮名を付けるような学習に進んで取り組むことを勧める。

8　漢字を使う習慣を身に付けさせる指導について（５・６年）

【グループ対抗ゲーム問題例】

（表）

いまからいちまんごせんねんまえごろから、ちきゅうのきこうはかんれいかとおんだんかをくりかえしながら、だんだんとあたたかくなっていった。このじだいのきこうのかわりぐあいはきゅうげきで、たとえばやくいちまんさんぜんねんまえには、……

（裏）

今から一万五千年前ごろから、地球の気候は寒冷化と温暖化をくり返しながら、だんだんと暖かくなっていった。この時代の気候の変わりぐあいは急激で、例えば約一万三千年前には、……

【指導の流れ】

1　作文や新聞作り、総合的な学習の時間での分かったことのまとめなど、文章を作成した後は、習った漢字を正しく使っているか、常に自分で見直しをするように習慣付ける。

2　朝のスキルタイムなどを活用して、グループ対抗のゲームを行わせる。

「画用紙に、グループで話し合って、教科書や本、新聞などから、文章（長めでつながりのある文章）をひらがなで写しましょう。漢字に直す部分を赤などで目立つように工夫しましょう。また、何から出題したかについても、書くようにしましょう。裏には答えを漢字で書きます。」

3　各グループの問題が作成できたら、時間を見つけて、グループ対抗の漢字に直すゲームを行わせ、合計点数を競わせる。

【留意点】

1　見直しは、一回だけでなく、二～三回は行うようにする。また、時にはペアで読み合ってチェックし合う活動を取り入れることで、正しく見直そうとする意欲を高める。

忘れた漢字や正しいかどうか自信がもてない漢字は、自分で国語辞典などを引いて確認する習慣を身に付けさせる。

2　表の平仮名だらけの文章を見たときに、気付くことはないか質問する。裏の漢字を使った文章と比較させ、漢字を使う有効性に気付かせる。特に、同音異義語の具体例を挙げ、漢字にすることで、正しく意味を伝えることができることを実感させる。

９　その他①（自信と意欲をもたせる漢字指導）
～豆テストを効果的に利用しながら～（５・６年）

１　はじめに

高学年ともなると、漢字のみならず、すべての教科で個人差が見られるようになり、「どうせ自分は、何をやってもダメ！」「運動は得意だけど勉強は苦手！」という児童が見受けられるようになる。

そういった児童にも「努力は報われる」「練習した分だけ、結果として表れる」という、学習に対する自信と意欲をもたせたい。

２　家庭学習における漢字練習の仕方の例

① 豆テストに予告された漢字十問を、平仮名を見ながら漢字ノートに書く。市販の漢字ドリルは、漢字と平仮名がページの表裏になっているので、利用すると効果的。

② 答えのページを見ながら赤ペンで丸を付ける。

③ 間違えた漢字だけ、練習する（回数は本人に任せる）。全部できた場合、豆テストで百点の自信のある場合はそこで学習終了！

④ まちがいがあった場合は、もう一度、「豆テストに予告された漢字十問を、平仮名を見ながら漢字ノートに書く」を繰り返す。時間を少しずらしたり、順番をわざと変えたりして行うとより効果的である。

※ ノートは毎日調べ、まちがって丸を付けていないか目を通し、「頑張っているね」「完璧」等の励ましを添える。

※ 年間を通して全て満点だった児童の努力の様子を紹介したり、工夫している児童のノートをコピーして教室に掲示したりすることで意欲付けを図る。

３　漢字豆テストの効果的な利用例

① 豆テストは、漢字ノートにはり付けておく。はったときにノートからはみ出さない大きさにして、大量に用意しておく。

② 出題するときに、出し方を少し変える。

例えば「顔」という漢字を出す場合、「顔を洗う」とか「母の顔」とか既習の漢字を取り混ぜて出題してみる。

「『洗う』や『母』は、点数には入れないが丸は付けること、豆テストにたくさんの丸が付く人が本当に力のある人」と話し、既習の漢字を使ってみようとする意欲を育てる。特に、漢字を得意とする児童に満足感を与えることができる。

丸がたくさん付いた児童には、点数のほかに「Good」や「見事！」などの一言を添えるとより有効。

③ 児童の実態に応じ、百点ならシール二枚、九十点ならシール一枚を配り、漢字ノートに貼らせる。

学期の最後にシールの枚数を確認し、がんばりを賞賛する。

※ 簡単なものも取り混ぜて出題することで、苦手な児童に対しても意欲をもたせる。続けることが大切なので、負担に思わず「楽しみ」や「余裕」をもたせることで継続につなげる。

9　その他②（音読指導を通して漢字の読みに迫る指導）
～教材文との出合いからまとめるまでの音読指導～（５・６年）

1　はじめに

高学年になると、低学年の頃はあれほど熱心に行っていた「本読みカード」がなくなったり、あったとしても、形骸化したりしがちではないだろうか。音読によって漢字が正しく読めるかどうか確かめることができるので、音読練習を大切にしたい。

2　国語以外の教科でも音読を大切に

国語以外の教科書も、「漢字の読み」に気を付けながら音読させたい。一斉読みや指名読みを行う。

音読を通して、漢字を正しく読むことを意識付けさせたい。

3　新しい教材文との出合いを大切に

授業の中で行う「一文読み」。一つの教材を読み通すのに多くの児童に読む機会を与えることができる。また、順番で行うため「心の準備」ができ、児童の負担も減らせるので、手軽に実践できる方法の一つである。

前日に「一文読み」を行うことを予告しておく。

まず、教師が範読し正しい漢字の読み方や言葉のまとまりが意識できるようモデルを示す。その後、座ったまま次々に一文ずつ読んでいく。

二回戦では、つまずいたり、漢字が読めなかったりしたら「立つこと」などの約束事を決めておく。ただ、立ったときに「ううん、残念、長いところ当たったからね。それでもここまで読めたら、立派です。」というように担任がフォローし、あくまでも次回への挑戦意欲の高揚を図る。

学級集団が「一文読み」に慣れてくるとゲーム感覚で楽しめ、読みの苦手な児童が立たずにすめば自信につながる。教材文がすべて読み終わるまで繰り返す。

※　音読を通して、新出漢字の読みや読み換えの漢字の読みを確認する。その際、振り仮名は付けさせず、読み方が不安な児童はサイドラインを付けさせ意識させる。

4　授業のスタートに既習ページの音読を

授業のスタートに、既習ページの音読から始めることもひとつのアイディア。指名音読で、長さも一文単位ではなく、形式段落の一～三段落分と幅をもたせる。読み終えたら、簡単なコメントで励ます（「すらすら読めているね」「もう少しゆっくり読むといいね」等）。前者が褒められるので、次者候補には緊張感が走る。「本読みカード」の成果を見る上でも有効。

5　単元の最後は朗読大会で

単元の最後は朗読大会で終える。時間をかけ過ぎると長続きしないので、一時間で全員が終える長さの範囲を読ませる。形式段落二～四段落分の長さが適当。

児童に応じて読む場所は担任がその場で決める。朗読の得意な児童は会話文の難しそうなところを、苦手な児童には単元の初めの方の部分を読ませるなど工夫し、読み終えた児童一人一人に簡単な励ましのコメントを送る。

どこを読まされるか分からないことから、どの児童もしっかり練習して臨むことが期待できる。

９　その他③（文章の中で漢字を用いる作文指導）（５・６年）

１　はじめに

「高学年なのに、作文を書かせるとすべて平仮名。一年生で習った漢字も使っていない。」こんな経験があるのではないだろうか。

だからといって、やっとの思いで自分の思いを綴っている児童に、十分な励ましなどがなく漢字や原稿用紙の使い方まで言い出すと、作文そのものが嫌いになってしまうおそれがある。

そこで、児童に書かせた作文を二つの観点から評価する方法を勧めたい。

２　評価について

①漢字を使っていることと、原稿用紙の使い方が正しいことのみを評価

内容はもう一息といったところだが、文字も丁寧で漢字もたくさん使われ、かぎかっこや段落もきちんとしているという作文に出合うことがある。

このような作文は、書き方の面でぜひ評価したい。「漢字Aとか、かぎかっこA、段落A」とか褒めるだけで気を付けるはず。項目を増やさず、漢字を使っているか否かで評価してもよい。

②書かれている内容のみを評価

「書くことを苦としない」「楽しみながら書ける」ことを最終目標としているので、「自分の気持ちを正直に綴ったもの」や「出来事や場面が読んでいる人の目に浮かんでくるような作文」があれば、児童に紹介する。また、全員にコメントを書いて励ます。

３　作文は教室に掲示して児童の目に触れるところにおく

（例）

①　作文を書かせるときに用意するものは、Ｂ５判の二０字×一０行の二００マスの原稿用紙。（四００字詰め原稿用紙を使うよりは、簡単に一枚が埋まる原稿用紙を使わせた方が、たくさん書けたという満足感を児童に与えることができる）。

②　Ｂ５判のクリアファイルを台紙に使って書かせたものをファイルしていく。それを掲示して児童が互いに見合うことでよさに触れることがねらいである。

③　行事後の作文でも良い。書く機会を増やしたい。一時間以内に書き終えることを目標とする。

※　書かれている内容に関して丸の形に変化を与えることで評価しても効果的である（ぐるぐる丸、花丸、花丸に葉っぱを付けたり等）。文字や漢字を一つ一つ直すことはしない。「観点を明確にして励ます」「掲示することで見合う」「回数を重ねる」ことが指導のポイント。